



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

Swiss Confederation

— スイス連邦 —

海外事情



金融と時計の街



岩竹 要 IWATAKE Kaname

大日本ダイヤコンサルタント株式会社／地図環境事業部 地図環境部 地盤水理室

皆さんはスイスと言えば何を連想するでしょうか？ 永世中立が国際的に認められていることをはじめ、雪に覆われた広大な山々や精巧な時計、または美味しいチーズを連想することも多いのではないのでしょうか。人それぞれで連想するものは異なりますが、意外とスイスについて知らないことがたくさんあると感じるかもしれません。本稿では、地質調査で利用する試験装置の製作をスイスの企業に依頼し、その試験装置の製作打合せでスイスのチューリッヒ州を訪れた際に感じたスイスの魅力についてご紹介します。

スイス・チューリッヒ州について

チューリッヒは、スイス連邦中央部にある世界有数の金融都市であり、中世から残る建物も多く立ち並ぶことから、スイスにおいて経済・文化の中心を担っています。

日本から出発する際は、成田空港からチューリッヒ空港への直行便が出ており、フライト時間はおおよそ13時間となります。

スイスでは地理的・歴史的理由

から4つの公用語（ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語）が定められており、最も話者が多いのはドイツ語となっています。英語は公用語ではないのですが、初等から中等教育で習得が義務付けられており、英語を話せる方は多いです。ただし、ご年配の方々はドイツ語しか話せない人が多いので、スイスへ旅行を予定している方はご注意ください。また、スイスを訪問する際にもう一点注意し

なければならないことは、スイスの標識や案内板のほとんどがドイツ語もしくはフランス語であり、空港や駅以外で英語の標識や案内板が一切ないことです。筆者はスイス滞在中、チューリッヒ州のメンハルトルフという町にある「Hotel Lowen (写真1)」に宿泊しましたが、空港－メンハルトルフ間の移動の際にドイツ語の案内板を読み間違えたため、目的地と反対方向の電車に乗る羽目になってしまい



写真1 スイス滞在中に宿泊していたチューリッヒ州メンハルトルフにある Hotel Lowen

ました。Google Mapを確認してすぐに間違いに気づき、次の駅で折り返すことができたので、大事にならずに済みました（もうスマートフォンなしで海外渡航は考えられませんね）。

人々、生活

試験装置の製作打合せでチューリッヒ州のメンハルトルフには3日間滞在しました。たった3日間ですが、日本とは生活様式や文化が違っていると改めて感じさせられることがいくつかありました。

まず物価が非常に高いことです。世界有数の金融都市である背景からか、近年では「世界一物価の高い都市」とも呼ばれることがあります。物価が高い分、治安の良さや教育水準の高さ、インフラの整備も行き届いているため、世界的に見てもとても住みやすい都市として認知されています。ただし、旅行で訪れる際はかなり予算に余裕を持たせることをおすすめします（筆者は低予算だったため、お土産は最小限にとどめました）。

次に目に付いたことは、歩行者が横断歩道を渡る際の車両の動きについてです。日本では横断歩道の手前で一旦停止しない車両を

よく目にしますが、スイスでは道路の混雑状況に限らず、歩行者が横断待ちであれば車両は必ず停止していました。スイスの方に伺ったところ、これは当たり前文化だそうです。日本では横断歩道の手前で一旦停止する車両は少ないと伝えると、「日本人はいつも仕事に追われているから余裕がないのでは？」と冗談交じりで言われましたが、割と確信をついているのではないかと考え、「はい、その通りです！」と思わず答えてしまいました。

そして最も驚いたことは、なんとスイスでは飲酒運転が認められています。厳密には日本と血中アルコール濃度の基準が異なっているからなのですが、スイスの道路交通法では、1リットル中に0.5ミリグラムまでの血中アルコール濃度ならば飲酒しても車両の運転が可能とされています。飲む人の体質にもよりますが、ワインならばグラス2杯、ビールならばジョッキ1杯程度が目安となります。日本人の基準で考えるとヨーロッパの方は体つきが大きい人も多いので、1杯程度なら意外とすぐに酔いもさめるのかもしれません。住む地域が変われば習慣も法律も本当に異なる

のだと一番感じさせられた出来事でした。

料理

スイスで有名な料理と言えば、「チーズフォンデュ」を真っ先に思い浮かべる方が多いでしょう。チーズフォンデュは、細かく削ったチーズと熱した白ワインを合わせて溶かしたところに串に刺したパンをつけて食べる料理です。実は日本でいうところの「鍋料理」に該当するため、スイスでは基本的に寒い時期にしか食べないそうです（レストランでは観光客向けに年中提供されているそうです）。日本では温野菜やソーセージなどをつけて食べることが多いですが、スイスでは基本的にフランスパンなどの固いパンのみをフォンデュ（フランス語で、「溶ける・溶かす」）します。そのため、スイスの方からすれば、誰が国外からの観光者かすぐに見分けがつくそうです。では肉や野菜が食べたいときはどうするのか？ 答えは「チーズフォンデュを食べた後に、別の店に行って肉や野菜を食べればよい。今はチーズフォンデュを食べることだけに集中するんだ！」とスイス人独特のこだわりを教えていただきました。実際、



写真2 チューリッヒ市街地で食べたチーズフォンデュ



写真3 食事の締めとなるチーズのおこげ



写真4 チューリッヒ市街地での食事風景（筆者は左から2番目）



写真5 会食後にパンとウインナーとビールを食す筆者

熱々でコクのあるチーズを絡めたパンは美味で、それを程良い酸味の白ワインで流し込むと、確かにパン以外の食材は必要ないのではないか！と思えるほどの絶品だったことを覚えています（写真2）。また、チーズフォンデュの締めのお食べ方として、鍋底が見えるほどチーズが少なくなってきたら、チーズの油分が抜けるまでじっくりと焼いて「チーズのおこげ」として仕上げます。チーズのパリパリとした食感と、コクの増したチーズそのものの味を楽しめるので、締めとしては最高です（写真3）。そして食後にハーブティーを飲むことで口の中がさっぱりするので、リラックスして食事を終えることができます（写真4）。なお、筆者は食事の量が少なかったためか、会食後に近くのカフェでパンとウインナーとビールを食しました（白ワインを大量に飲酒していたせいか、写真を見るまでこの時の記憶が一切ありませんでした）（写真5）。

観光

チューリッヒ市内の散策は時間が限られていたため、あまり観光できてはいませんが、その中で印象に残った観光箇所をいくつかご

紹介します。

まずはチューリッヒ中央駅に降り立つとバーンホフシュトラッセ（駅前大通り）が観光客を迎えてくれます（写真6）。ここは駅からチューリッヒ湖までを結ぶ約1kmの目抜き通りであり、世界有数の高級ショッピングストリートとして知られています。バーンホフシュトラッセは数々の戦火を逃れた土地でもあり、歴史的な建物が多く残されているので、散策するだけでも中世にタイムスリップしたか

のような気分を味わえます。

次にグロスミュンスター大聖堂は11世紀から12世紀初頭にかけて建てられたロマンティック様式の建築物です（写真7）。大聖堂内部には美しいステンドグラスや歴史的な彫刻もあるとのことですが、筆者らが大聖堂を訪れた時間には既に閉館時間を過ぎていたため、見学することはできませんでした。機会があればぜひ大聖堂内部を見学したいところです。なお、大聖堂には2つの塔が建てられており、塔



写真6 夜のバーンホフシュトラッセ（駅前大通り）

を上ると展望テラスがあります。展望テラスからはチューリッヒ市街を流れるリマト川や旧市街の街並みを一望することができます。

また、絶好のビュースポットとしては、リンデンホフの丘がオススメです。この丘は数多くの歴史的出来事の舞台となっており、近世では1798年にスイス憲法への宣誓が行われました。現在では、散策路やベンチが整備されており、リラックスした雰囲気を楽しめます。筆者らは夜にこの場所を訪れましたが、とても美しいチューリッヒ市街地の夜景を一望することができました（写真8）。

おわりに

スイスへの訪問は仕事ということもありますが、お互いの国の習慣や文化について現地の人と話す機会があり、大変貴重な経験だった

と感じています。スイスの企業とは今も交流があり、場合によってはこの夏に再度訪問するかもしれません。その機会があれば、前回

とは異なる角度からチューリッヒの街並みや人々と触れ合ってみたいと思います。



写真7 グロスミュンスター大聖堂（夜間撮影）



写真8 リンデンホフの丘から見たチューリッヒ市街地の夜景